

# ゆくりなく紅の中で

日時・2019年 **11月9日** (土)

場所・公益財団法人 吉備路文学館 2F  
岡山市北区南方 3-5-35  
電話 086-223-7411

開演・午前 11:00～ / 午後 2:00～  
料金・1,000 円入館料込み (学生は入館料のみ)



中銀南方C (文学館南庭園) ゆくりなく紅の中で 撮影 明石英嗣館長

第三回 一葉シリーズ

【演目】樋口一葉 作

一葉日記

雪の日

大つごもり

【朗読】白萩の会

脚色 演出  
たけいり ひかる子



「誠に我は女成りけるものを、何事の思い有りとも そは成すべき事かは。はかなき草子に墨つけて世に出せば…」近世以後、初の女性作家といわれている一葉の美しい言葉の響きを私たちが声でつたえます。



石田節子



大塚教馬



大西 美香



金池兼広



榊原公江



竹入光子



福島いつゑ



三宅和子



もみの志郎

出演 白萩の会

作 樋口一葉

## 大つごもり

明治 27 年 12 月 22 歳

お店の若旦那、石之助は、義理の母に反抗してごろつき仲間と遊び歩いている。

この日、大みそかにも金の無心の為父親の帰りを待っている。働き者のお峰は、育ての親の伯父の難儀を救うため、やむにやまれずお店のお金に手をつけてしまう。

明日は正月という大つごもりの夜一気に結末へと…

それぞれの心情を見事に書き顕した一葉の人間力に脱帽です。

## 雪の日

明治 26 年 3 月 21 歳

名家の一人娘の珠は早くに両親を亡くし伯母に育てられていたが、恩ある伯母の静止を聞かず教師の桂木一郎と駆け落ちしたが…。

見渡すかぎり地は銀砂を敷いて、雪は胡蝶の羽のように舞い/ 禍の神というものもしあればまさに我が身は誘われたのだ…/  
袖の涙に昔を問えば/  
なかだち 媒 は雪の日だった/

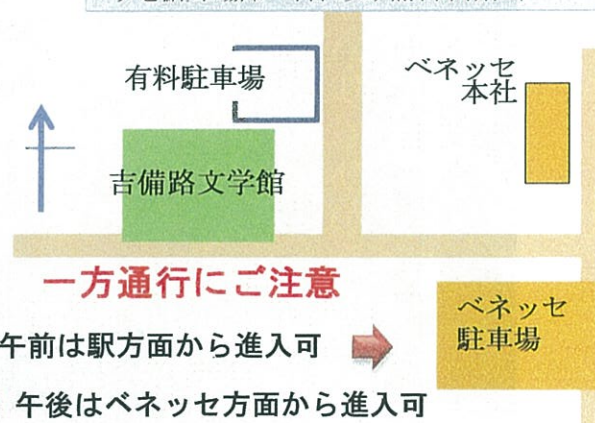
## 一葉日記

明治 20 年～29 年  
15 歳～24 歳

半井桃水帥に小説の指導を受けていたが心無い噂により別離を余儀なくさる。傷心の一葉は文学から離れ荒物雑貨商を営むが失敗。

その後再び筆をとり、没するまで「たけくらべ」「十三夜」等数々の名作を残し「奇跡の 1 年半」といわれている。今回は日記から「雪の日」執筆の背景を辿る。

\* 吉備路文学館の公演入場者はベネッセ駐車場を当日のみ無料利用可



主催・白萩の会 代表 竹入 光子  
連絡先・白萩の会事務局 0867-28-2016 (榊原)  
プロデューサー 090-7122-7455 (大塚)